

平成 21 年 5 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号：17520230  
 研究課題名（和文） 中国宋代における別集の編纂に関する文学論的・社会文化論的研究  
 研究課題名（英文） A Study on the Compilation of Collections of Literary Works in the Song Period from the Perspective of Literary Theory and Social Culture  
 研究代表者  
 浅見 洋二（ASAMI YOJI）  
 大阪大学・文学研究科・准教授  
 研究者番号：70184158

研究成果の概要：本研究は、宋代を中心とする時期の中国における詩文集、特に別集（個人の詩文集の編纂に関して、文学論および社会文化論の視点から考察を加えたものである。宋代には、文人たちが別集の編纂に自覚的に取り組むようになる。それに伴って、「編年」や「分類」といった別集の編纂方法が明確な形をとってあらわれてくる。加えて、別集に「注釈」を附すことも行われるようになる。宋代における別集の注釈に見られる特徴の一つとして、真蹟・石刻等の資料が活用されるようになったことが挙げられる。宋代の別集編纂をめぐるこれら一連の現象には、宋代に成立した新たな文学観、そして文学テクストを取り巻く新たな社会文化論的環境の反映を見て取ることができる。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	800,000	0	800,000
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	510,000	3,810,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：宋代，別集，編年，分類，注釈，真蹟，石刻

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者（浅見）は、宋代を中心とする時期の詩と詩学に関する研究を行ってきた。近年は特に、宋代文人の文学観（文学認識）に関する研究に取り組んできた。その一環として宋代における「詩史」説（「詩」に「史」としての機能を認める文学論）に関する考察を進めるなかで、「詩史」説と編年形式による詩文集（別集）の編纂とが密接に結びついていることを明らかにした。このことから、

宋代の文学観について考察するに際しては、詩文集の編纂についての考察が不可欠であることに気づくに至った。本研究が、宋代における別集編纂について、文学論的な視点からの研究を構想した所以である。

総じて宋代には文人たちが別集の編纂に自覚的に取り組むようになる。それに伴って、別集の編纂方法についても自覚的な取り組みがなされるようになる。上述の「編年」形式は、そのような動きの中から生み出されて

きたものである。そして、宋代には編年と並んで、いわゆる「分類」形式による別集編纂も盛んになる。編年による別集を編纂・受容した文人と分類による別集を編纂・受容した文人、両者の間には社会階層の面から見て大きな違いが存することが予想された。本研究が、社会文化論的な視点からの別集編纂に関する研究を構想した所以である。

宋代における別集編纂に見られるもう一つの大きな特徴として、別集に注釈が施されるようになったことが挙げられる。別集に附された注釈には、注釈者の文学観があらわれていると予想される。そこには同時に、注釈者および当該の注釈を受容する者を取り巻く社会文化的な背景も反映されていると予想される。本研究が、別集に附された「注釈」を主たる研究対象として設定した所以である。

## 2. 研究の目的

本研究は、宋代を中心とする時期の中国の詩文集、特に別集（個人別の詩文集）の編纂に関して、「編年」、「分類」そして「注釈」をめぐる問題を基軸に据えつつ、文学論および社会文化論の視点から考察することを目的として構想された。主たる目的は下記の三点である。

(1) 宋代における別集の編纂状況の整理。本研究が対象とする宋代には、出版文化の隆盛に伴って別集の編纂が盛んになる。本研究は、かかる宋代における別集の編纂状況を整理して把握することを第一の目的とする。

(2) 宋代における別集の編纂にあらわれた文学観に関する文学論的研究。一般的に言って、別集の編纂は編纂者の何らかの文学観に基づいて行われると考えられる。宋代には、「編年」と「分類」という二つの別集編纂方法が確立する。いずれも、宋代以前には明確な方法として自覚されていなかったものである。編年と分類、それぞれの方法の背後にはどのような文学観が存在していたのか、本研究はこうした問題について考察を加えることを第二の目的とする。

(3) 宋代における別集の編纂にあらわれた文人階層に関する社会文化論的研究。別集の編纂とそれを支える文学観を解明する上で必要となるのは、別集の編纂を取り巻く社会的・文化的な背景に関する考察であろう。特に別集というものが具体的な書物という形をとって存在するものである以上、この問題は重要である。宋代にあって、別集はどのような文人の手によって、どのような場において編まれたのか。それは、どのように書写・刊刻され、どのように流通して読者のもとに届けられたのか。あるいは、「編年」と「分類」という別集編纂方法について言えば、

前者の方法による別集を作成・受容した文人階層と後者のそれとはどのように異なっているのか。本研究は、こうした問題を解明することを第三の目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、主として上記研究目的に記した三点を目的として行う。以下、上記三点の目的に即する形で、本研究の方法、およびその特徴について述べたい。

(1) 宋代には詩文集（別集）の編纂が盛んになる。その結果、当時刊刻された版本の一部が現在にまで伝えられるだけでなく、同じ宋代の文人が記した序文・跋文等の文献資料も数多く残されるに至る。従来の研究においては、これらの文献資料は二次的な資料として軽視されてきたが、宋代における別集の編纂状況を整理する上で、それらの資料は同じ宋代の文人の認識のあり方を伝えてくれる点で極めて重要な資料である。本研究は、宋代の別集編纂の具体的な状況を把握するため、宋代文人の手で記された序文・跋文等の資料を積極的に活用する。なお、ここで特に重点的に取り上げるのは、北宋を代表する文人である蘇軾・黄庭堅、南宋を代表する文人である楊万里・陸游の別集であるが、必要に応じて他の文人の別集にも及ぶ。

従来の研究において詩文集が研究対象となる場合には、書誌学的なアプローチがなされることが多かった。そこでは、より完全な詩文集のテキストを確定することに主な目的は置かれていた。しかし、本研究において採用するのはそのようなアプローチではない。上記研究目的の(2)、(3)に記したように、文学論的あるいは社会文化論的な視点からのアプローチを採用する点に本研究の方法上の特徴が存する。

(2) まず、文学論的な視点からのアプローチについて述べよう。ここでは特に、「編年」と「分類」という別集編纂方法にあらわれた文学観の解明が主要目的となる。編年については、宋代に盛行する「詩史」説との関連を視野に入れつつ考察を加える。また、分類については、宋代に盛行する「用事」、「用典」をめぐる文学論との関連を視野に入れつつ考察を加える。これらの考察に資料として用いるのは、上述の別集に附された序文・跋文等の資料であるが、これらに加えて、別集に附された「注釈」をも資料として積極的に活用する。

(3) 上述の(2)の研究と並行して、社会文化論的な視点から、宋代の別集編纂を取り巻く社会的・文化的な背景に関する問題について考察を加える。ここでの考察においては、別集に附された序文・跋文、注釈等の文献資料のほか、宋代文人の各種詩文作品を資

料として積極的に活用する。

#### 4. 研究成果

本研究によって得られた成果について、上記研究目的に記した三点に即する形で述べたい。

(1) 本研究は、宋代における別集の編纂状況を整理して把握することにより、次のような新たな知見を加えることができた。

①宋代には、文人たちが自らの詩文集(別集)を自らの手で編纂することが広く一般化する。同時に、宋代以前の文人たちの別集についても、再編が本格的に行われるようになる。これらの現象の背後には、宋代文人の別集編纂に対する自覚的な取り組みの姿勢を見て取ることができる。

②宋代に編纂された別集の編纂方法としては、「編年」と「分類」とが二つの方法として確立する。前者の編年による別集編纂と連動する形で、「一官一集」すなわち作者の経歴に沿って作品を幾つかの段階に分けて編纂する方法も宋代に至って広く一般化する。

③詩文集の注釈は、宋代以前には、『楚辞』や『文選』等の一部の総集に附されるだけであったが、宋代になると別集に対しても注釈が附されるようになる。杜甫や韓愈など宋代以前の文人の別集のほか、蘇軾や黄庭堅といった同じ宋代の文人の別集にも注釈が附されるようになる。

④宋代における別集の注釈に見られる大きな特徴の一つとして、「真蹟」やそれを石に刻した「石刻」といった、作者の親筆原稿もしくはそれに準ずるテキストが活用されるようになったことが挙げられる。この種のテキストは、宋代に至って初めて文人たちの関心を集めたテキストと言うことができる。

上記①～④のうち、特に④については、これまでほとんど看過されてきたことがらであり、本研究の最大の成果の一つと言っていだらう。ただし、宋代の別集編纂に関する書誌学的データの収集・整理の作業については、不十分なものとどまってしまっている。今後、引き続き取り組むべき課題と言わなければならない。

(2) 宋代における別集の編纂にあらわれた文学観(文学認識)に関する研究の成果としては、次のような知見を新たに得ることができた。

①詩文集を編むということは、詩文作品を「定本」として確定するということを意味する。文人たちが自らの別集を自らの手で編むようになったということは、宋代において文人たちが自らの作品の定本制定に対して自覚的に取り組むようになったということの意味していよう。まずは、この点に宋代文人

の文学観の大きな特徴を見て取ることができる。

②宋代の文人たちの別集編纂をめぐって記された各種文献資料の中には、「焚棄」すなわち自らの作品原稿を焼き捨てるという行為について記したものが目立つようになる。また、それと並行して、「改定」すなわち自らの作品原稿に修正を加えるという行為について記したのも目立つようになる。これらの記録からは、宋代において文人たちが作品の定本制定過程に対して自覚的に取り組むようになっていたことの端的な反映を見て取ることができる。上記①に述べたような文学観のあらわれの一つと言えよう。

③宋代の別集に附された「注釈」には、「真蹟」や「石刻」等の資料が活用されるに至ることを初めて本格的に指摘した。また、それらの注釈には、「定本」成立以前の段階、換言すれば「草稿」段階にあるテキストの性格に着目しようとする新たな文学論的視点の成立が認められることを指摘した。これらを踏まえて、宋代の注釈者たちが、この新たなテキスト観のもとに詩文作品の注釈作業を行っていたことを明らかにした。

④宋代に確立する「編年」形式による別集編纂方法は、宋代に至って盛行する「詩史」説と密接に結びつく形で成立していた。そのことを、研究代表者(浅見)はすでに年譜という書物の成立と関連づけながら解明していたが、本研究においては各種別集に附された序文・跋文等の資料によってより精密に明らかにした。また、「一官一集」という別集編纂方法を「編年」や「詩史」説と関連づけて明らかにした。

⑤「編年」と並んで宋代に確立する「分類」方法については、宋代に至って盛んに議論されるようになる「用事」、「用典」論との密接な関連を指摘した。これを踏まえて、作詩の模範として別集を参照する際に有利な分類形式による別集の流布の背後には、作詩の「材料」として先人の別集を活用しようとする文学観が存在していたことを明らかにした。

上記①～⑤のうち、②、③、④は、本研究によって得られた成果の最も重要なものと言える。今後、宋代の文学観について研究を進めてゆく上で、重要な基盤となりうるであろう。また、ある時期の文学観を解明しようとする際に、その時期の詩文集とそれをめぐる各種言説を資料として活用することが有効であることを示した点は、今後の中国文学研究に対して一つの方法論的示唆をもたらすものとして、重要な意義を持つだろう。それに対して、⑤の成果については、現時点ではなお不十分な部分を多く残している。今後、引き続き取り組むべき課題である。

(3) 宋代における別集の編纂にあらわれ

た社会的・文化的背景に関する研究の成果としては、次のような知見を新たに得ることができた。

①宋代においては、「編年」形式による別集を作成・受容する文人が高度な文化水準を有する士大夫であるのに対して、「分類」形式による別集を作成・受容する文人は中位もしくは下位の文化水準を有する士大夫であることを、別集に附された「注釈」の分析を通して明らかにした。

②宋代に編纂された宋人の別集のうち、「注釈」が附されるのは、蘇軾や黄庭堅といったごく一部の有力な文人に限られる。換言すれば、別集に注釈が附されるということを通して特定の文人の作品の聖典化が進行していたと言ってもいいだろう。本研究では、蘇軾と黄庭堅という北宋の二大文人の別集に附された注釈を通してその現象の一端を明らかにした。

③宋代に編纂された別集に附される「注釈」のうち、「真蹟」や「石刻」等の資料が活用されるのは、やはり蘇軾や黄庭堅といった一部の有力な文人のケースに限られる。本研究は、この点についても、上記②と同様のメカニズムが働いていたことを明らかにした。

④宋代に編纂された別集に附される「注釈」において「真蹟」や「石刻」等の資料が活用される例の分析を通して、宋代における詩文作品の制作・受容・流通・伝承の具体的な状況の一端を明らかにした。

上記①～④については、いずれも萌芽的な研究の段階にとどまってしまっていることは否めないが、従来注目されてこなかった資料を新たに発掘して活用した点、またそれらを踏まえて新たな研究の方向性を提示している点において、今後の中国文学研究にとって大きな意義を有するものと言えよう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 浅見洋二, 黄庭堅詩注の形成と黄氏『山谷年譜』—真蹟・石刻の活用を中心に—, 集刊東洋学, 100, pp.182-pp.205, 2008, 有
- ② 浅見洋二, “焚棄”与“改定”—論宋代別集的編纂或定本的制定—, 中国韻文学刊, 42, pp.80-pp.92, 2007, 有
- ③ 浅見洋二浅見洋二, 「焚棄」と「改定」—唐宋期における別集の編纂あるいは定本

の制定をめぐる—, 『立命館文学』, 598, pp.32-pp.42, 2007, 有

- ④ , 「形似」の変容—言葉と物の関係から見たいわゆる宋詩の日常性に関する一考察—, 『中国—社会と文化』, 20, pp.390-pp.408, 2005, 有

[学会発表] (計 1 件)

- ① 浅見洋二, 由“校勘”到“生成論”—有閑宋代詩文集の注釈特別是蘇黃詩注中真蹟及石刻的利用—, 第 14 回唐代文学国際学術研討会, 2008 年 10 月 27 日, 蕪湖 (中華人民共和国)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

浅見 洋二 (ASAMI YOJI)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号: 70184158

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし